

## 審査の結果の要旨

氏名 御厨 貴

本論文は、1880年代の日本政治史を、「地方経営」と「首都計画」の両面から照射した、戦後政治史学の基盤を提供した業績である。

1880年代の日本は、暴力と反乱と秩序破壊を特徴とする1870年代とも、組織や制度の安定化と秩序完成を特徴とする1890年代とも異なる、独自の時代層を有する時代であった。即ちそれは、議会制度・内閣制度・官僚制度という統治のハードコアを創り上げる営みと、首都東京と諸地方における種々な政策や計画を課すソフトウェアを創り出す営みが、相互に影響を与え交錯しつつ並行して出来上がる、ダイナミックな時代であった。本論文は、「地方経営」と「首都計画」の両面について、長州出身の井上馨と薩摩出身の三島通庸を主役とし、明治期のさまざまな人物を脇役とすることによって多面的に描き出した力作である。

井上馨は、松下村塾出身の長州閥で伊藤博文、山県有朋と並び称せられ、元老として大正期まで君臨し、外務・内務・大蔵・農商務など、担当した政策分野は広がった。しかし個人的には常にスキャンダルとダーティな噂につきまといわれ、首相にはなれず仕舞だった。その意味では、明治国家の“異端の系譜”に属する。1880年代には条約改正、臨時建築局、自治党に関わり、欧化主義の流れを促進し、鹿鳴館外交や西洋流首都計画、そして官有林野払下による自治党育成など、明治国家をつくるにあたって大胆でユニークな将来構想を推進したが、すべて失敗に終わった。同じ時期に、伊藤が憲法と帝国議会、山県が軍制と地方自治とに一応の成功を収めるのと、対照的である。彼は、条約改正、首都計画、自治党育成など、常に内外に敵をつくり出す課題をとりあげたのみならず、その目標の達成のために、これまた欧化主義、臨時建築局、官有林野払下計画といった内外の攻撃を受けやすい“異端”的手段を好んで選択した。そして過剰演出のせいもあり、あたかも演技論における道化の如くに統治システムの内外から指弾を受け、敗者となる運命をたどったのである。

他方、薩摩出身の三島通庸は、「地方経営」と「首都計画」を通じて頭角を現わした。まず内務省土木局長として山県に仕え、福島県令時代などの現場体験から地方政治事情をよく考え抜いた画期的な地方補助政策を提案した。しかし各省対立の激化を太政官制が收拾できなかつたためその政策は実現に至らず、

土木局拡大による事態の転換を図り、それは工部省廃止の結果をもたらした。しかし、山県の内務省改革と三島のそれとの間には思惑の相違があり、続く「首都計画」において顕在化した。即ち、「地方経営」において内務省土木局の強化拡大をめざした三島は、内閣制度の創設と同時に警視總監に転じ、「首都計画」を推進する立場から、外相井上馨が総裁を兼任していた臨時建築局の副総裁兼任となった。そこで、山県内相一芳川頭正東京府知事の市区改正計画と、井上外相一三島警視總監の西洋流首都計画とは鋭く対立し、結局、地方経営構想は志半ばに終わり、首都計画では全面退却となるという、敗北の憂き目に遭った。本論文が、井上に続く二人目の“異端の敗者”として取り上げたゆえんである。

本論文は、この二人を主な対象とすることにより、明治期「地方経営」と「首都計画」という二つのトピックを「楕円」構造をなすものとしてとらえ、精密な実証と「物語性」の保持という、歴史学に常に随伴する二律背反的な課題を同時に追求したものである。戦後日本の歴史学は、マルクス主義の影響下に展開された、無味乾燥な理論を歴史事象に当て嵌める人間不在の営みと、それへの反発から叙述された、史料を絶対視し実証できないものはすべて無視するという、やはり人間不在の営みとに色濃く影響されてきた。本論文は、歴史叙述に「物語性」を回復するという、当然といえば極めて当然の営為でありながら、同時に高度な実証性を兼ね備えたものとして、斯界においてかねて高く評価されている。

委員会での審査の主たる対象は本論文であるが、今日に至る本論文の研究上の意義も、同時に審査対象とされた。著者はわが国を代表する政治学者として著名であるが、本論文の基本的視角は現在に至る研究活動において十分に生かされており、まさに今日の「平成国家をつくる」過程においても、明治期の経験が臨床政治学的な先例として生きる可能性が指摘される。種々の問題にまつわる個々の論点を措くとすると、今日の政治過程における最大の争点は、やはり「地方」と「首都」にほかならない。本論文の対象は一回起的な歴史であり、そこに特有な具体的問題はもちろん異なるとはいえ、そこで検討され獲得された歴史の知恵は、現在の政治過程を観察する上でも、極めて有効なものである。

以上のような次第で、本論文は博士（学術）の学位請求論文として合格と認められる。